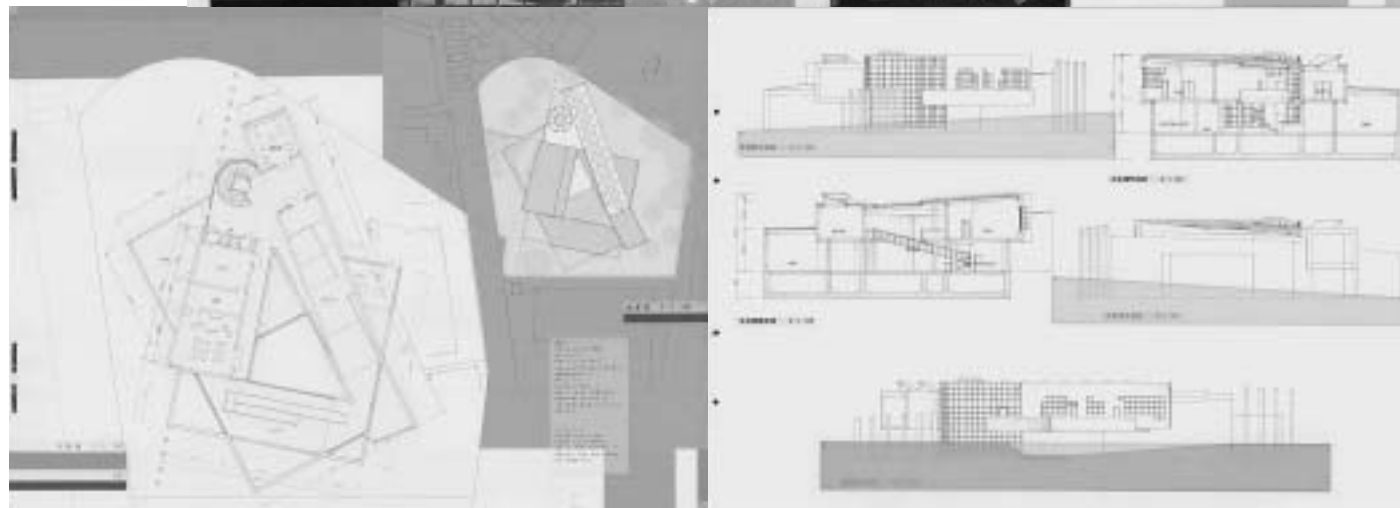




大森 紘子



建築設計製図Ⅱ

第2課題
芸術の住まい/
アートギャラリー

2年1組

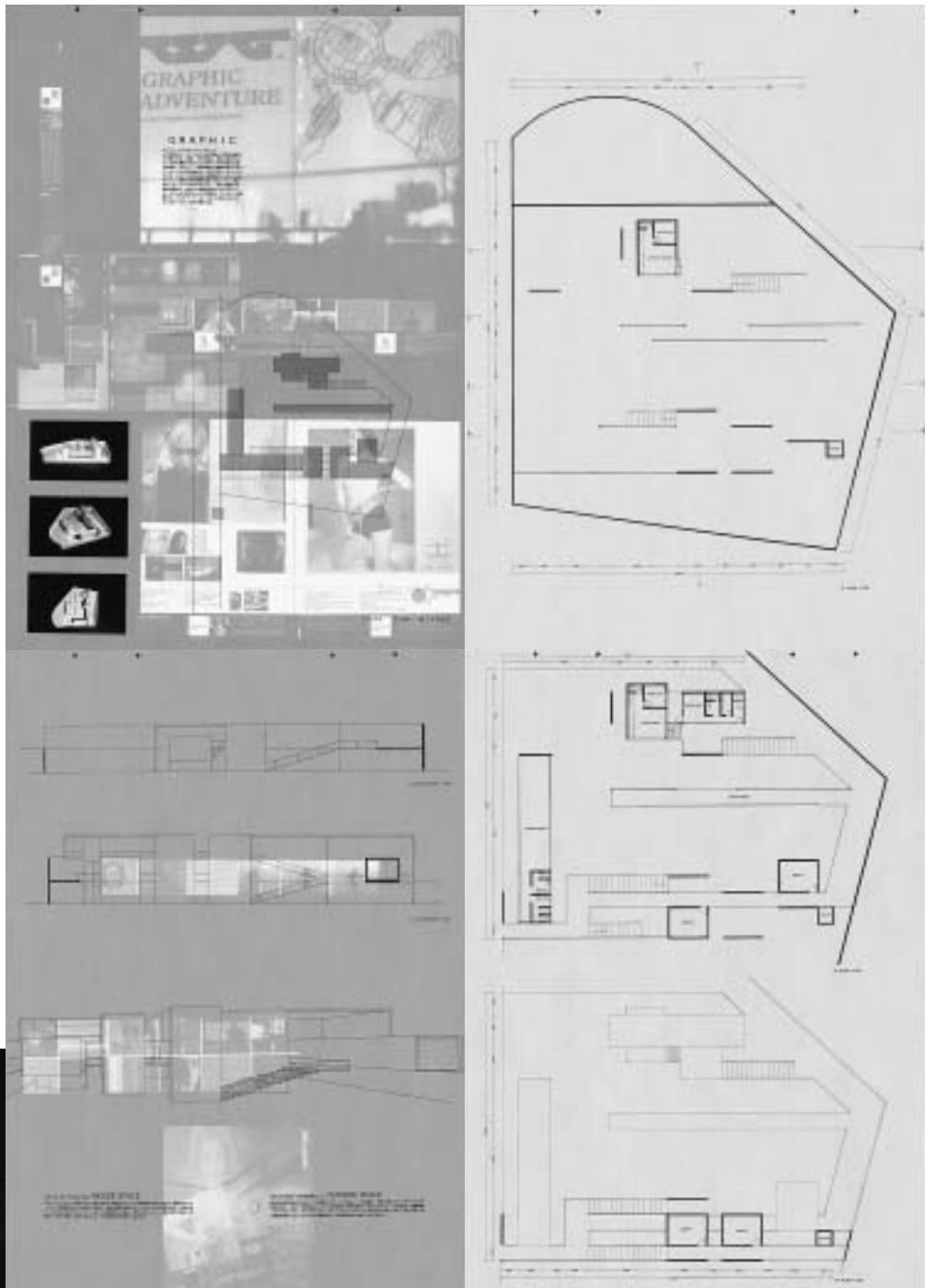
担当：
若色 峰郎
片桐 正夫
野村 歓
小川 守之
佐藤 光彦
白井 勇
横山 聡
30

大森 紘子
草地が見える
——それは屋根だった。
樹木が見える
——それは家だった。
中にいる人々が見える
——彼らは幸せそうだ。
建築による人間と自然の共生を
目指すワッサー。自然との対話
の術は無数にあり、それをいか
に昇華するのか。彼は、芸術に
依ってである。では、自分は何
に依るのか？

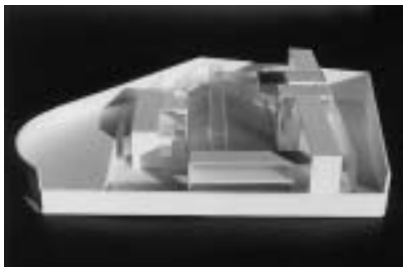
一貫して自然をテーマとして作
品を創ってきたが、未だ水面に
浮く油のごとく、その関係は交
わることなく、ただ装い、その
様を呈するに終わっている。

指導=野村 歓
作風が異彩を放つオーストリア
生まれの建築家フンデルト・ワ
ッサーを記念するギャラリーが
この敷地に適しているかどうか
は異論があろうが、作者は、ワ
ッサー自身がこの敷地に異質さ
を感じ、芸術という行為によっ
て自然と対話をし、そのあふれ
る色をもってメッセージを託す
のではないかと期待している。
建築物は、多角形の中庭を持つ
2層から成る。1階には玄関、
受付、事務の他にギャラリー、

ミュージアムショップ、軽喫茶
が、2階にはギャラリーの他に
閲覧室やホールが設置されてい
る。これらの諸室は、中央に大
きな樹木を配した中庭を取り囲
むように配され、スロープを含
めた動線によって流れるように
巧みに配されている。また、鋸
状の屋上部分は、北面にはギャ
ラリーに自然光を導く天窓を設
け、南面にはソーラーパネルを
設置し、省エネ対策を講じてい
る。その他の屋上部分や庭の部
分では草花や樹木の育成を図る
と同時に、自然光の満ちる光の
井戸を演出しようとしている。
全体の構想もさることながら、
各部の演出、図面の表現に至る
まで、隙のない非常に密度の高
い作品である。



宮部 文美



宮部 文美

グラフィックアーティストのためのギャラリースペース。この空間は、アーティストが演出した空間を体験する場である。その演出する枠として、ただフラットな床、壁、天井で構成され

たbox/inside space、そして凹凸のある壁を1枚の投影面とする/outside space、2つがある。inside spaceでは、画面やスクリーンといった表現の枠を持たない箱を、自由な方法で演出する。outside spaceでは、壁のスクリーンで広場を演出し、土地全体に1つの世界を作り出す。この広場は、アーティストを特定せず、多くの人々に開かれたこの空間で、アーティスト同士またアーティストとそこに来る人達とのコミュニケーションを生む場となる。

指導=小川 守之

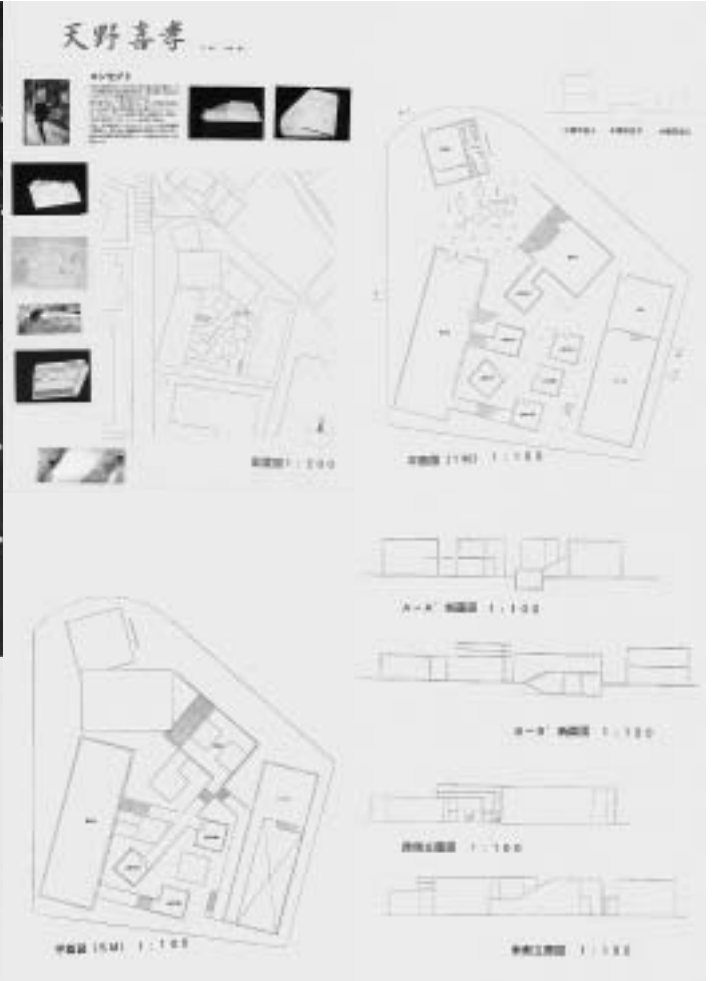
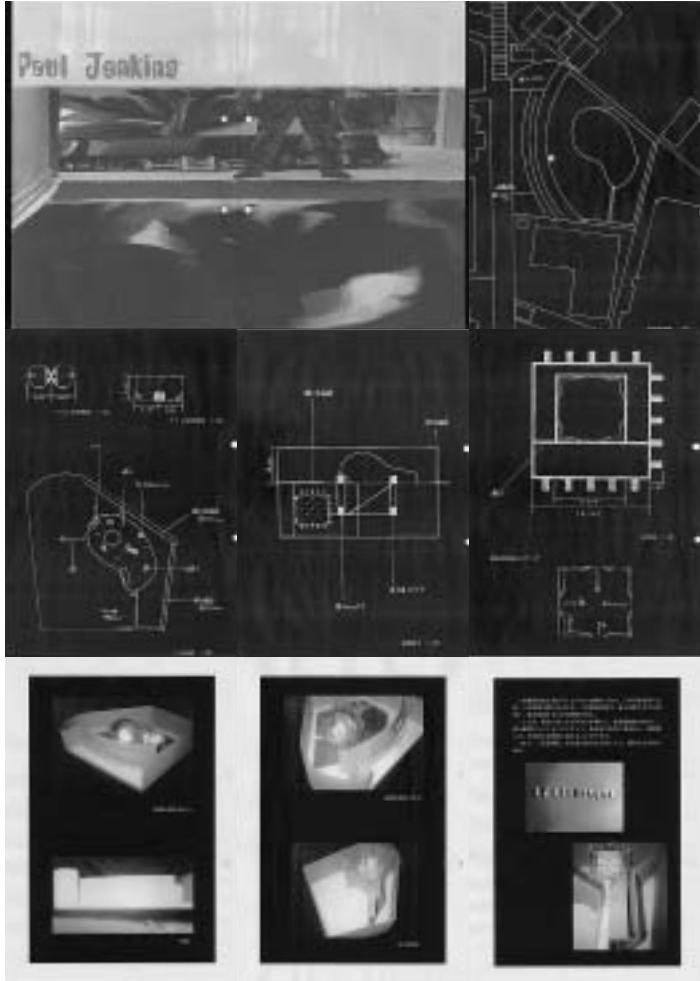
雑誌や広告、ポスターなどを媒体として日常的に目にする、グ

ラフィック・アーティストのための展示空間である。特定の誰かを想定はしていない。展示はアーティスト自身が構成する。室内の壁と柱型、天井に投影された女性の写真、雑誌で見つけたその変容の面白さが、宮部さんの発想の取っ掛かりになった。2次元の作品が3次元の空間に投影されるとき、作品は拡大され、入隅、出隅で折れ曲がり、歪み、全く違った表情を見せる。投影された3次元の空間の各面は、均質化し、溶け出し、2次元化する。この着目は面白いと思った。それを具現化した空間構成も、敷地をよく読んだ魅力的なものになっている。元々は

マスメディアのための作品が、4つの閉じた箱、ミニマムな展示空間の中で変換される。外部には、面をすらしした壁面が、投影面として用意されている(外部の投影面の鑑賞は夜間に限られてしまうが)。見方を拡張すれば、敷地全体のあらゆる空間要素が作品の投影面になり得、同様にあらゆる場所が、鑑賞のための場所になり得る。敷地全体を使ったコンポジション、道と直角な線状のレイアウト、地となるレベルを一段掘り下げ、建物を全て浮かせたこと、道と平行に浮かんだカフェ、半層ずれたアーティストのためのプライベート・スペース、4つのギャラリーのすらし方等、シンプルだが変化に富んだ楽しい空間を創り出している。

荻野 朗子

小林 秀一



建築設計製図Ⅱ

第2課題
芸術の住まい/
アートギャラリー

2年2組

- 担当：
本杉 省三
宇杉 和夫
高宮 真介
川口 とし子
野沢 正光
前田 光一
吉井 信幸

荻野 朗子
色は感覚である。色を認識した時点で、我々は形を認識している。しかし、形はあっても色がなければ形は見えない。色は神秘である。しかし、我々は色のある物を日々当たり前のごとく見ている。色という感覚を敏感にさせていなければ、色の発展はなかったであろうし、つまり芸術の発展は考えられない。我々は色のさらなる発展のために、視覚的のみならず、肉体的に、精神的に色を取り込み、個々の中で血肉化しようではないか。

指導=宇杉 和夫
図学演習・基礎製図法を空間の発想を重視するデザイン教育に

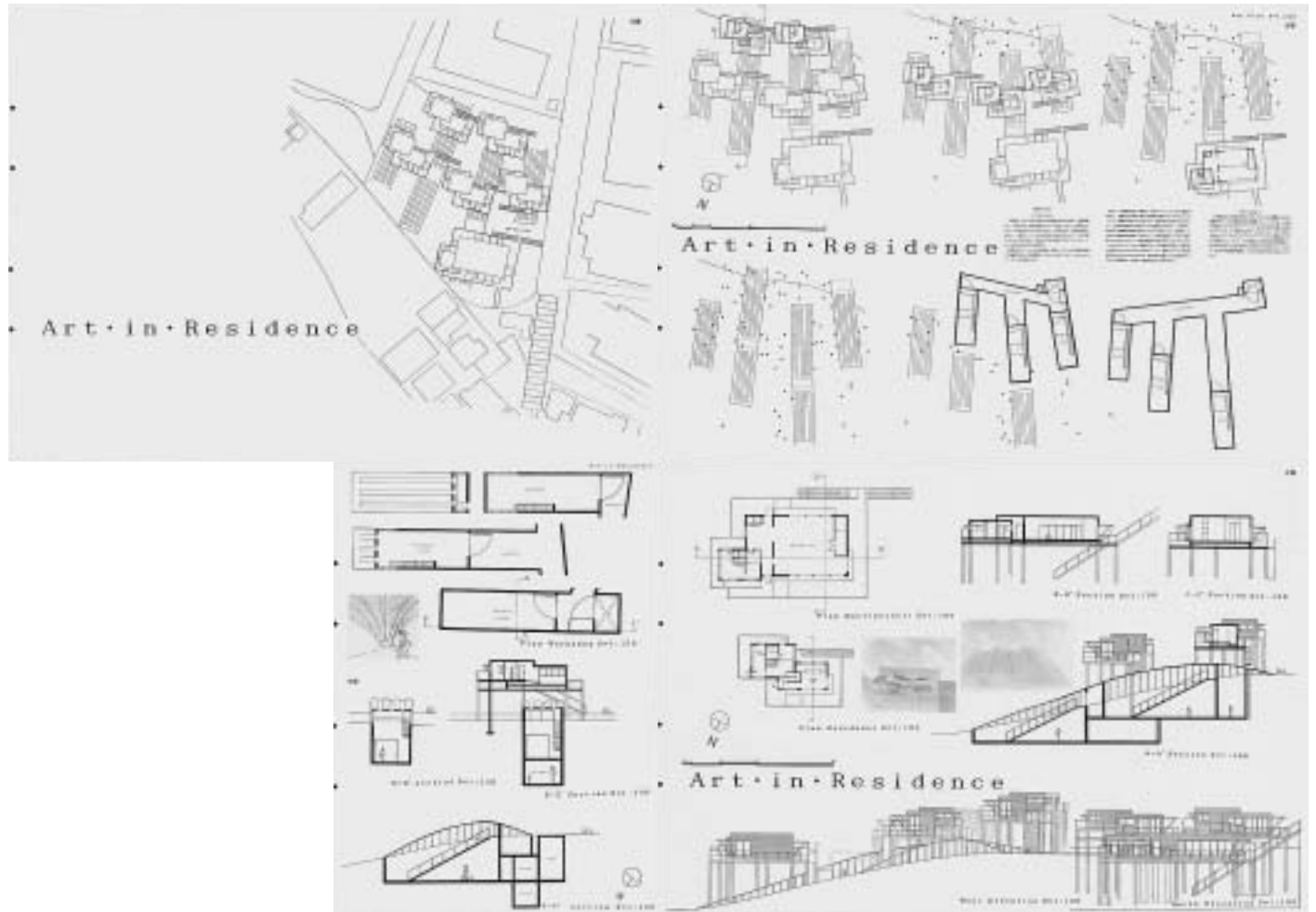
変えてきた感想として、あれだけ自由に発想してきた学生が、3年生になると今の傾向の物知り顔の建築デザインになってしまふのが少し不満でした。その意味で荻野さんには期待するものがある。
前課題が集合住宅の制約された条件での評価できる作品となったので、この課題はできるだけ自由に考えた。
彼女はアイデアの肝心なところは見せないで、うまくまとまらないところをしつこく聞いてくる今では少ないタイプの学生。聞くだけ聞いて、また次の週は全く違う案をもってくる。これが半分楽しい。半分の不満は新案の未熟性。
ポール・ジェンキンは環境と

人の動きを色彩で操作する。その空間は「色」。しかし、なぜ高い塀で囲まれた水盤に浮かんだ半透明の卵型空間から始まるのかはわからない。また、その内部の地下には色に対する欲望の空間と時間、そのメインの空間が触覚をもつ色の立方体に表現体現されるのかわからない。おまけに、その途中では「色のカプセル」まで飲まされる。これじゃあ、サティアンだ。
講評会では案の定、議論と意見が沸騰。イニシエーション論(先生)と来たい人だけくればよい論(本人)に分かれた。高い塀も迷路の入口も水盤も卵も色の立方体も、文化の普遍性を見て上手い説明の仕方もあるのに。彼女に任せた。

私の一番好きな案は芋坂真人君の棟方志功記念館、版画の陰と陽の対比交叉をずれた立方体の連続に器用にまとめた質の高い空間。しかし、その表現は恐ろしいほど稚拙。発表に至らず、私の課題となった。

小林 秀一
天野喜孝の描く絵には独特の世界があり、ストーリーが込められている。どうすれば絵から何かを感じることができる場所になるかということを考え、一枚の絵、数枚の絵、全ての絵から、それぞれストーリーをイメージできるような空間構成を目指した。また、建物と作品を一体化させるのではなく、全体をキュ

戸内 広太郎



一歩状のシンプルなデザインにまとめ、イメージするという行為の邪魔にならない空間になるようにした。

指導=前田 光一

ひとりの芸術家をクローズアップし、その人物と作品を紹介するというこのプログラムは、芸術表現の一部である建築のデザインと他の表現との創造的なコラボレーションであり、そこから引き出される空間のイメージやストーリーを構成する素材は極めて魅力的なものだ。その意味で、この課題を進めていく上での最大のポイントは芸術家の選定にあった。しかし多くの者はこの主旨を理解できなかったようだ。私のクラスでは設計案

の補足として、施設を半公共化すること、外部空間を含め、敷地全体に展開する造形と空間を意図すること、新しい展示方法を提案することなどの要求をした。

小林君は画家の絵の中に潜むストーリーをそれぞれ空間のヴォリュームによって表現したいと考え、大小に分けた立方体の展示空間を敷地全体に展開している。一見無作為に思えるこの構成は、大きな立方体を敷地周辺に配し、適度に開きながら何気なく全体を囲い込み、その間に自立した小さな立方体を置くことで内、外部に二重性の空間を生み出すよう意図している。表通りから導入部へ設定したカフェテラスはとてもユニークだ

し、立方体で分割され、迷路のように連続する外部空間は、西欧の古い都市街区のように予期せぬ通りや広場が現れ、巡るのが楽しそうだ。展示室とアトリエの空間性や展示方法を詰め切っていないのが残念だが、全体の構成には成熟した能力をうかがわせる提案があり、今後の展開が期待される作品だ。

戸内 広太郎

芸術とは、何かを伝え訴えるものであり、人が用いるコミュニケーションの一種であろう。本郷という町の歴史・山の手記憶。それらと呼応するには、個人ギャラリーよりもむしろ、誰しもが芸術を通してコミュニケ

ーションするための施設が必要ではないか。アーティスト・イン・レジデンス。この施設がきっかけとなって、この町が芸術の町として活性化してほしい。山の手土地の記憶を有しながら……。

指導=高宮 真介

2年生の後半になると、住宅系の課題から離れてパブリックな建築にシフトする。そこでは具体的な敷地の場所性に対する建築のあり方に加えて、パブリックとプライベート、つまりサービスされる側とする側の問題や、人間と〈モノ〉、この場合だとアートワークとの対話の空間というようにプログラムが複雑化し、設計の楽しさも倍加さ

れる。そんな楽しさに応えてくれたのが戸内君の作品だった。アーティスト・イン・レジデンスのための施設をこの場所に設定した作品で、地形をうまく取り込んだ作品である。

まず、GLを地山のようなならかな斜面にして完全にパブリックに開放した。そしてプライベートなアーティストの住まいを高床式の住宅に、セミパブリックなアトリエ兼ギャラリーを地下に設けた。そんな構成が大変良くできているし、ワークショップ兼ギャラリーの空間も興味深い。そして何よりも彼の作品から受ける牧歌的(?)な佇まいが、この本郷界隈に良くマッチしているように思った。